神秘家宗教詩人シレジウスの被造物観

被造物観

青　山　　玄

最近地球上の大気が世界的に汚染され，その影響が自然界の動植物にまで歴然と現れていること，フロンガス・排気ガス・工場煤煙などによってオゾン層が大規模に破壊されつつあること，地球を取り巻く宇宙空間にはスペース・ディブリ（space debri）と呼ばれる宇宙ゴミ，即ち人工衛星の部品や破壊された人工衛星の残骸が無数に漂流していて，汚れや危険は宇宙空間にまで広がっていることなど，美しい「水のオアシス」とも言われるこの地球の環境について，数々の悲しい知らせが伝えられるにつけ，ふと懐かしく思い出した言葉がある。1955年3月，南山大学の卒業式記念の講演に，宗教と科学について話してくれた物理学者湯川秀樹氏の「現代科学の研究を進めるには，何らかの宗教的世界観を持つことが必要である」という言葉である。具体的に説明されなかったので，湯川氏がこの言葉で何を言わんとしておられたかは分からないが，現代科学技術の急速な発達に，目標・意味・方向性あるいは抑止などを与えるべき「宗教的世界観」が，そのような形では殆ど何一つ確立されず，言わば世界観不在と言われても仕方ないような状態で，科学技術だけが一方的発達を遂げた所に，近年我々現代人を不安にしている環境問題の一因があるのではなかろうか。その責任はすべて，科学や技術をそのようなものに発達させた政治経済と科学技術の側にあって，久遠の真理を目指す宗教や哲学の側にはない，などという考えは許されないであろう。宗教者や思想家が，環境の悪化を積極的に促進したことも意図したこともないことは事実だとしても，視野を大きく広げて神の側から，あるいは宗教や哲学の分野からの助けを必要と

している人類全体の側から見直す時，彼らは，このような重大問題に十分目覚めていなかった，あるいはその問題の解決のために殆ど何もして来なかったという責めを，免れることはできないように思うからである。環境問題の深刻さが日を追って明らかにされつつある今日，遅ればせながら我々も，宗教や神学の側からこの問題の緩和改善に何か協力することができないものかと道を求め，本腰を入れてこれまでの遅れと怠りを償おうと努めるべきではなかろうか。

ところで，科学技術の不足面を補足する道はいろいろあるであろうが，私がまず思い浮かべたのは，デカルト以来の，そして18世紀の啓蒙主義によって世界的に広められた，余りにも人間中心的機械論的でドライな自然観・人間観を矯正するために，神中心あるいはキリスト中心的な，暖かい自然観・人間観を現代人に提示し，神の被造物をどのように眺め，それにどのように対応したら良いかについて，現代の科学者たちと共に新たに考察し，模索する道である(1)。そのための一つの試みとして，ここでは，デカルトより28年遅く生まれた同時代人で，始めは医者であったが，後に神秘家宗教詩人として生きたカトリック司祭 Angelus Silesius（本名 Johannes Scheffler，1627-77）を取り上げてみたいと思う。幸い，Silesius の詩集は，1991年に植田重雄氏と加藤智見氏の共訳で岩波書店より出版され，文庫本2冊の『シレジウス瞑想詩集』にまとめられているので，その訳書の末尾に付記された詳しい解説と共に，両氏の訳業に感謝しつつ，利用させてもらうことにしたい。

まず，その略歴と思想的立場について述べると，Silesius の父 Stanislaus Scheffler は，ポーランド貴族の出身であるが，当時ドイツ領であったシレジア州に移住して，ブレスラウの宮廷医師 Johannes Hennemann の娘マリアと結婚し，Silesius が14歳の時，75歳で永眠した。2年後，母も39歳で急死したので，Silesius を始めとする3人の子供は親戚の世話になったが，財産があったので，Silesius はシレジアの名門校エリザベート・ギムナジウムを卒業後，医学を学ぶため1643年にシュトラスブルク大学に進み，

翌年オランダのライデン大学に移って医学を本格的に学んだ。彼はこのライデンで，故郷のブレスラウから来ていた Abraham von Frankenberg と知り合いになったが，Frankenberg は Jacob Böhme（1576-1624）の神秘思想に心酔し，その作品を集めたり伝記を書いたりした人なので，Silesius もその影響を受け，46 年にイタリアのパドヴァ大学に移ってからも，48 年にここで医学博士の学位を得て故郷ブレスラウに戻り，翌年シレジアの侯爵 Silvius Nimrot の侍医になってからも，文通その他で Frankenberg と親しく交際していた。当時 Silesius は，まだルター派のプロテスタントであったが，かねて興味を抱いていた Meister Eckhard や Johannes Tauler の神秘思想の研究に没頭するようになり，友人 Frankenberg が急逝した 52 年に，4 日間で 6 章からなる『瞑想詩集』の第 1 章を書き上げたと伝えられている。同じ頃，彼は本職の医業から離れて，53 年 6 月にカトリックに改宗したが，それは，彼の神秘思想が当時のルター派の教会から危険視されて，受け入れられなかったからのようである。61 年 5 月，彼はナイセでカトリック司祭に叙階された。ルター派の神学者たちは彼のこの転向を激しく攻撃して止まなかったので，彼も 63 年以降，55 に達する数多くの神学的著作あるいは一般庶民向け著作を草して弁明に努め，シレジアでのカトリック反動改革に貢献し，1677 年 7 月，52 歳で帰天した(2)。

以上が Silesius の略歴であるが，次にその主著の一つで，殆どすべてがアレキサンダー二行詩から成る『瞑想詩集』について調べてみると，1657 年にウィーンで出版された初版には“Geistliche Sinn- und Schlußreime”（霊的な箴言脚韻詩）という題がついており，1675 年にグラーツで出版された第二版にはその題名が“Cherubinischer Wandersmann”（ケルビムのごとき旅人）に変更されて，初版の題名が副題にまわされ，“Geistliche Sinn- und Schlußreime zur göttlichen Beschauligkeit anleitende”（神的な瞑想へと導くための霊的な箴言脚韻詩）という形に少し長くなっている。小さなことのように思われるかも知れないが，この題名の変更は，40 歳代半ば乃至後半の著者の内的円熟または心境の変化を，反映しているのでは

なかろうか。

と言うのは，キリスト教の神秘主義は大きく分けて，6世紀初頭ごろに書かれた偽 Dionysios Areopagites の『神名論』に始まり，13世紀から14世紀にかけてのドミニコ会員 Meister Eckhard や Johannes Tauler らのドイツ神秘主義に至って最高潮に達した本質神秘主義と，12世紀の Bernardus に始まる，言わば神との神秘な愛の交わりを重視する花嫁神秘主義[3] との二つの流れに区分して良いと思うが，初め前者の流れに身をおいていた Silesius は，『瞑想詩集』の第二版を出す前には，意図的にはっきりと，当時ラテン諸国に広まっていた後者の流れをより重視する立場に身を移し，神と魂との愛の交わりに力点を置く気になったのではなかろうか。それまでの各種神秘思想の流れを受け入れ，複眼的な霊の眼で神をも人をも眺めていた Silesius は，1652年に『瞑想詩集』の第1章を書いた時から，既に自分の中に前述した二つの流れを融和共存させているが，第2章以降には神またはキリストとの愛の交わりに，より多く紙面を割いていることも注目に値する。

第1章の中で，

「神は純粋な無である」(① 25＝第1章25番)，「無を越えていて，一切のものの中に無を見る人がこの神性を見出す」(① 111)，「私は神の似姿を身に負っている」(① 105)，「神が私にとって大切であるように，神にとって私が大切である」(① 100)，「神が私を選び出すと，神は私の中にだけいる」(① 200)，「神は私の中で新たに生まれようとしている」(① 201)，「神になろうなどと一度も思わなかった人が，真の神になる」(① 92)，「神の中にある私の魂は，時間と空間の外にある。だから魂は神の宿る場であり，永遠の言葉に等しくなければならない」(① 89)，「神性は私の樹液であり，私から芽を出し花を咲かせるものは，成長を促す聖霊である」(① 90)

などの言葉で，神人合一の神秘な内在神，インマヌエルの神を力説している限りでは，Silesius は，まだ Eckhard らの本質神秘主義の流れに棹をさ

していて，Jacob Böhme の神秘主義に近い立場にいたと思われる。

この Böhme が“Psychologia vera”（真の心理学）に書いている「自らの内にあるもの，それはそれ自身からは識られない。しかし，おそらく霊に基づいて感知するようになる。それゆえ内なるものは自己から動き出ていろいろな形体となって自己を顕示する。さもなければ神は認識されないであろう」という思想は，後にヘーゲルやヘルダーリンの絶対者の自己顕示・自己分割と再合一の思想に影響を与えたと言われているが，ヘーゲルは Silesius の『瞑想詩集』についても，『芸術学講義』の中で「直観と情感のすぐれた冷静さと深さで，事物の中での神の実体的現存，神と自己との合一，また人間の主体性と神の主体性を，驚くほど神秘的な表象力で表現している」と書いている(4)。

察するに，実年期の Silesius は，自分の受け継いだ本質神秘主義の流れがヘーゲル流の観念的哲学思想に堕して，各人の心の中に人格的個性的な香り高い愛の実を結ばなくなる危険性を鋭敏に感知し，神の子として，また乙女として，神と共に清く貧しく強く生きることの方を，なお一層強調しておく気になったのではないであろうか。マルティン・ブーバーも，若い頃この瞑想詩集を読んでいたようで，「存在の根源であり，名をもたぬ非人格的な神性が，人間の魂に誕生することについて，エックハルトからシレジウスに至る神秘主義の影響を受けた」と語っている(5)。Silesius の瞑想詩集が普及させようとしたものも，ブーバーが意図したような我と汝との人格的対話，しかし何よりもまず，人間の中に内在して現存しておられる神との親密な愛に満たされた対話であったと思われる。その詩集には，16世紀後半の十字架の聖ヨハネの作品に度々登場する無・道・泉・炎などの言葉も少なくないので，聖ヨハネの著作を読んでいたのではないかと調べてみたが，詩集には，聖ベルナルド，ヘルフタの聖ゲルトルーディス，アシジの聖フランシスコ，聖クララ，アヴィラの聖テレジアらの名前は登場しても，十字架の聖ヨハネの名前は見当たらない。聖ヨハネの作品は，死後も長いことヴェールに覆われて殆ど世に知られずにいたそうだから，シ

レジアにいたSilesiusには影響を与えなかったと思われる。

前置きが長くなったが，以上述べたような思想的立場にあるSilesiusが，それではどのような被造物観を抱いていたかについて，次に三つの要点に分けて考察してみよう。しかし，初めにお断りしておくが，Silesiusの詩集は，詩という表現形式からしても当然ながら，何かの思想を体系的に述べようとしたものではないし，また被造物を主要テーマにしたものでもない。従って，これからの話は，そこに断片的に散在している言葉からの私の推察であり，多少言葉を補いながら読み取った解釈である。前置きに多くの紙面を割いたのも，このような解釈が，一つの可能性として妥当性を持つことを示すためである。

1．万物を創造者である神の側から眺めること：

Silesiusの詩の中でまず注目をひくのは，

「外面的な目がここで見ている薔薇は，永遠に神の中で咲いている」（① 108），「被造物は全く神の中に存在しているのだから，どうして無になったり滅びたりすることがあり得ようか」（① 109），「神は被造物の中に自らをかたどった。もし神を知りたければ，被造物を見なさい」（④ 164），「被造物は被造物の中にいるというよりも，むしろ神の中にいる。被造物的なものが消え去ってゆけば，被造物はいつまでも神の中にとどまることになる」（① 193），「私の愛とあらゆる存在，それらはすべて神の残響である」（① 233），「神は今もなお世界を創造している。（中略）神にとっては，この世のように前とか後とかは全くないと知るがよい」（④ 165），「木を種の中に見るように，創造主である神の中において被造物を生き生きと思い浮かべなさい」（④ 185），「不完全なものは何一つない。砂利はルビーと同じように完全であり，蛙は天使セラフィムのように美しい」（⑤ 61），「創造は一冊の書物である。これを慎重に読むことのできる者には，この書物の中に創造主が見事に

語られている」(⑤ 86),

などの言葉である。これら，並びそれに類する他の多くの表現に接して，私は何よりも，この世の事物に出会ってそれらのイデアを想起した，プラトンの認識論を思い出した。Silesius は「プラトン的」詩人であり，過ぎ去るこの世の現実世界の中で苦悩する被造物の姿に接し，神の中での被造物の永遠の姿，理想の原形を洞察するセンスに，豊かに恵まれていた詩人だった，と称しても良いのではなかろうか。もしそうだとすると，彼が絶えず己を捨てて目に見えない内在の神，対象化されない「無」である神と一つになろう，神の内に安らごうと努めたこと，この世では貧しさを尊び，己の生活を厳しく律して，清く強く純粋であること，純真であることを強調したことも，この観点から新たに深く理解されて来るように思われる。彼にとり，被造物は神の自己啓示以外の何物でもなく，彼はそれを読み取ることの喜びで夢中になっていたのだから。当時の社会に広まりつつあったデカルト的人間中心主義を退けるためなのか，彼はその詩集の中でしばしば gelassen（放下・離脱・放念）という言葉を使っており，gelassen とは，「魂の中にイエスの意志があることである」(② 144)などと説明している。大自然に対する私たち現代人の関係を正しくするには，まず我なしのこのような詩人信仰者の眼をもって，自然を，神がその存在を望み善しとされた神の被造物，神の業として，あるがままに感謝と感動をもって眺めることが大切なのではなかろうか。

2．過ぎ行くものを通して語る神の声に耳を傾けること：

Silesius の詩の中で，次に注目に値するのは，

「光は，あらゆるものに力を与える。神自身が光の中に生きている。神が火でなければ，光はすぐになくなるであろう」(① 195)，「火はあらゆるものを動かすが，しかし決して動かされない。そのように，永遠の言葉はあらゆるものを高め動かす」(① 198)，「あなたに見えない

ものを見よ。音のない聞こえないものを聞け。そうすれば，あなたは神が語りかける場にいるのである」(① 199)，「まことに神は無である。しかも何ものかでもあるので，神が私を選び出すと，私の中にだけ神はいるのである」(① 200)，「おお，理解し難いことだ！。神は自らを失った。それゆえ，再び私の中で新たに生まれようとしているのだ」(① 201)，「私の愛とあらゆる存在，それらはすべて神の残響である」(① 233)，「どんな存在も必ず声を持っている。神は，至るところですべての被造物が神を賛美する声や反響を聴いている」(① 264)，「友よ，我々皆がいつも同じ歌ばかり歌っているとするなら，どの歌が良い歌で，どの歌が下手な歌であるか，ということになろう」(① 267)，「声の違いを多く指摘できればできる程，歌も素晴らしい響きを持つようになるものだ」(① 168)，「被造物とは，永遠の言葉の声である。この声は，時には優美に，時には激しい怒りをもって，自ら歌い響くのだ」(① 270)，「あなた方人間が牧草地の愛らしい花に親しめば，どんなにかあなた方は神に好かれ，美しくなることであろう」(① 288)，「薔薇は，なぜという理由なしに咲いている。薔薇は，ただ咲くべくして咲いている。薔薇は，自分自身を気にしない。人が見ているかどうかも問題にしない」(① 289)，「誰が百合の花を飾るのか。誰が水仙を育てるのか。わがキリスト者よ，どうしてあなたはそんなに自分にあくせくしているのか」(① 290)，

などの言葉である。これら，並びにこれに類する他の多くの言葉から察すると，Silesius は，刻々と過ぎ行くものの中に神の声を聞き取ろう，と努めていたように思われる。

福音書の中でメシアから度々批判されているサドカイ派やファリザイ派の誤りは，一体どこから生じて来たのであろうか。それは根本的には，聖書の中からただ変わることのない規則や教義だけを学び取って，そういう不動の尺度や言葉にばかり目を向け，その基準に少しも背かないよう行動していれば，神からますます豊かに祝福と恵みを受ける，などと考えた所

から生じたのではなかろうか。聖書は，確かに掟や教義も啓示しているが，しかし，何よりも生きているダイナミックな神の愛とその働きについて語っている書だ，と言うべきであろう。最高のものは，この生きている動的な神の愛と働きであって，掟も教義も，いや人間の言葉で書かれた聖書それ自身も，神の愛と働きを我々の心にはっきりと悟らせるためのもの，神の愛と働きに対する我々の心のセンスを磨いてくれる手段である，と言って良いであろう。

旧約の預言者たちは，何よりも過ぎ行く具体的な状況に直面して聴いた神の言葉に心を向けていたが，福音書に描かれているメシアも，何か不動の法や権利や道理によって人の行為の善悪是非を判断するのではなく，いつも今この場で天父は私から何をお望みなのかという，刻々と変わる具体的な神の御旨に心の目を向けていたように思われる。それはちょうど，愛し合っている者同志が，相手を少しでも幸せにしよう，相手の心のちょっとした変化や望みにもすぐに応えよう，としているのに譬えることもできよう。花嫁神秘主義への傾きを強めた詩人 Silesius も，神の御心に対するこのような預言者的愛の感覚を，時と共にますます鋭く磨いて行ったのではなかろうか。こういう詩人信仰者は，聖書研究も教会の掟や教義も大切にしながら，しかし，それらの基礎の上に立っての被造物との出会いの中に，日々神の愛と働きを認め知ることを，何よりも大切にしているのではなかろうか。

近代の科学技術の進歩は大きな賞賛に値するが，しかし，近代人はその現世的効用に心を奪われるあまり，このような詩人的感覚を退化させ，深刻な環境汚染を惹起しているだけではなく，心に幸せを見いだせずにいるのではなかろうか。また多くの既成宗教が，2千年前のユダヤ教のように，重厚な伝統の維持尊重を強調したり，聖書・教典の細かい研究に鎬を削ったりしつつも，「笛を吹いたのに，踊ってくれなかった」（マタイ，11：17）などと人々の教会離れに悩み，身軽な在家宗教と言って良いような新宗教にどんどん信徒を奪われているのも，知らないうちに心の中まで合理主義

的近代文明の潮流に汚染されて，動的な神の愛と働きに対する詩人的預言者的感覚を鈍らせているからではなかろうか。神秘家宗教詩人 Silesuis の生き方，ものの見方に，今こそ深く学びたい。

3．神から人間に与えられている偉大な使命と責任を自覚すること：

Silesius の詩の中で，もう一つ注目しておきたいのは，

「人間はあらゆるものを神にもたらす。人よ，あらゆるものがあなたを愛し，あなたのまわりに群がってくる。神のところに至らんがために，あらゆるものがあなたのところに走ってくるのだ」(① 275)，「私は神のもう一方の神である。ただ神のみが私の中に，永遠に神と同じで，しかも似たものを見出しているからだ」(① 278)，「正しく使えば害はない。(中略)神の注ぐ愛をあなたの自我が邪魔をする。だからその身にふさわしく世界を用いることが，いまだにできない」(② 34)，「あなた自身とすべての被造物とを成長させよ。そうすれば，神的本質があなたに吹き込まれるであろう」(② 57)，「優しい心を持てば，あなたは全地の王となれるだろうに」(③ 100)，「あわれな死すべき者よ，この世の色彩や卑しい生活に，そんなにしがみつくな。被造物の美などは，創造主自身とその最高の美への道を，我々に気づかせるほんのささやかな小道にすぎない」(③ 102)，「あなたの肉体を尊重せよ。肉体は，神の像を保存すべき聖櫃である」(③ 109)，「私は神の神殿である。もしこの神殿に何もなく清浄であれば，私の心の内部は至聖所となる」(③ 113)，「霊的な捧げもの。私の心が祭壇。私の意志が捧げもの。私の魂が司祭。私の愛が火と炎」(③ 116)，「秘められた王国。私は王国。私の心は玉座。魂は王妃。王は神の子である」(③ 131)，「天国の見張人は，被造物には死んだもののように見える。(中略)彼の神である創造者のためにだけ，彼は生きているからだ」(④ 120)，

などの言葉である。これら並びにこれに類する他の多くの言葉には，現実

の被造物世界の中で人間に与えられている偉大な使命と責任が，語られているからである。

人間は神から創られて神となるように，神と一つになるように召されている，と考えるこの思想は，ヘーゲル流弁証法哲学の萌芽として見られる恐れもあるであろうが，作者の意図はその方向になく，むしろアシジの聖フランシスコのように，あるいは天使セラフィムのように，神目指して真っ直ぐに昇って神の神殿，キリストの王妃となり，この世的には「死んだもののように見える」そのキリストの観点から，すべての被造物を眺め，支配し，世話するという所にあると思われる。デカルト以降の近代人には，この世中心・人間中心の観点から自主的に何でも，即ち神をも被造物をも，すべてを可能な限り利用して幸せになろうとする精神が，自覚するしないを問わず，あまりにも強すぎて，これが各種の公害や環境破壊の元凶になっているのではなかろうか。私たちはこの点，もっと宗教詩人 Silesius に学び，被造物の中に神の意図したものを眺めるセンスを磨いて，神の観点，キリストの観点から自然の秩序や生態系を尊重し，一切の被造物をバランスよく成長発展させるよう努めるべきであろう。人間ばかりでなく，その人間を容れているこの大自然界全体も，神の神殿と呼ばれるにふさわしくなるよう召されているであろうから。

原罪によって損なわれた現実の人間相互の間に各種のアンバランスと対立抗争が絶えないように，現実の自然界にも，各種のアンバランスと対立や争いが絶えず，そのしわ寄せを受けて，不当に早く絶滅の危機に追い込まれる動植物も少なくない。すべての生きとし生けるもの同志が，互いにその命を支え養い合って地を満たすように神から望まれている，この自然界の世話と支配は，神から人間に委ねられており（創，1：28），空しさに服従させられている被造物も，神の子らの現れを切なる思いで待ち焦がれている（ローマ，8：19-22）のではなかろうか。科学技術が宇宙時代を迎える程に大きく発達しているのだから，人間はその気にさえなるなら，軍備や無駄づかいの経費を削減し，創造神の心を心として，被造物共同の敵

である環境破壊や極度のアンバランスを排除することも可能であると思う。成すべき奉仕の大きさに怯えて眼をそむけることなく，しっかりとこの敵を見据えて，神の働きに対する明るい希望と信頼を新たにしながら，身近な所から改善に手がけたい。

註

(1) G. リートケ著，安田治夫訳『生態学的破局とキリスト教』，1989 年，新教出版社，pp. 61-78 参照。人間中心のドライな自然観は，自然を人間の所有物と考えた古代ローマ人の時から始まっていたが，デカルトが，人間以外の自然を単に「res extensa（広げられたもの）」と考え，人間を「考える者」，自然を「それに適したあらゆる目的のために利用する」権限を持つ者と定義した時から，このような人間中心の哲学思想を基盤にして，科学技術による自然界の搾取と破壊が，次第に遠慮なく押し進められるに至ったようである。

(2) 植田重雄・加藤智見訳『シレジウスと瞑想詩集』（下）pp. 271-277 参照。

(3) 花嫁神秘主義は，神またはキリストとの花嫁的愛の一致志向を表に出しているような神秘主義で，そのルーツは既に 3 世紀の Origenes や 4 世紀の Elvira の Gregorius の霊性にも見られるが，中世・近世のキリスト教においては，クレルヴォーの Bernardus を最初とし，Heinrich Seuse，十字架の Johannes，アヴィラの Theresia らの霊性に典型的にあらわれている。

(4) 前掲『シレジウス瞑想詩集』（下）pp. 284-285 参照。

(5) 前掲『シレジウス瞑想詩集』（下）pp. 284 参照。

Silesius : A Religious Poet's View of Creation

Gen AOYAMA

Recently rivers are polluted by waste liquids from factories and the air with smoke. There is sea pollution. The destruction of our earthly environment is also rapidly going on. The main reason for this pollution and destruction is the rapid one-sided development of various scientific techniques without a religious world view, which is able to give the development of the modern science the right meaning, direction and the necessary control.

In this area not only scientists and enterprisers, but also thinkers and religious believers would be partly to blame for this destruction, because they did not make enough progress in their idea of creation. Most modern people, especially after Descartes' philosophy, have a human-centric idea of creation. Such a view of creation is corrected by the idea of creation of Angelus Silesius (1624-77), who was born in Silesia (now in Poland) 28 years after Descartes.

From his poetical work "Cherubinischer Wandersmann" (1675^2) Silesius seems to be a *Platonic* poet who, faced with a thing, recollects its original idea in God. For him creation is nothing but the self revelation of God. He seemed to be engrossed in reading this realistic revelation of God. In order to sweep away the pollution of the environment it is important to see creation with the warm-hearted eyes of such a theo-centric poet, who considers everything as the present of a

beloved God and looks at it from this point of view.

Compared with Silesius, many modern people seem to attend too much to some rule, commandment, interpretation, ideology, faith, etc., which are made by someone and are not living nor changeable. Silesius, however, seems to have lived paying attention to every moment, receiving a new revelation and guide from the living God through creation. Unlike Plato he considered even his own body as the temple and the tabernacle of God. In the Gospels we read that Christ once named his own body as the temple of God and directed his attention above all to the will of the living Father. In conclusion, it can be said that the true desirable relation between mankind and creation will be born from such a poetic religious spirit of Silesius, which the modern world lacks.